

# 酒井 正

ワークショップ報告 2008年の夏に行ったワークショップの報告をする。

1. ワークショップタイトル 「思い-想い 気持ちをかたちにして、  
コミュニケーションをしよう」  
ワークショップ会場 21\_21デザインサイト（東京ミッドタウン）  
参加募集対象 小学生以上（保護者の参加も可能）

21\_21デザインサイトにおいて開催された「祈りの痕跡」展のイベントとして、下記のような展覧会コンセプトに沿った内容で子供達を対象にワークショップを行うこととなった。

展覧会のディレクターはコンセプトをこのように述べている

「書く」という人類最大の発明から生まれる芸術や文化は、過去から未来に、個人から集団に伝染する軌跡の痕跡である。21\_21 DESIGN SIGHT の舞台に登場するこれらの痕跡は、現代人の意識に新たな痕跡を刻みつけるだろう。

このコンセプトにそって個人ごとに「書く」という行為による発想から造形活動をして、それを繋げることで共同作業の意識をもたせ、そしてまた切り離し、独立させて家に持ち帰り、離れた場所でも気持ちで作品達が繋がっているようなストーリーをもたせた。自由な発想をどのようにスムーズに造形化させるか、そのプロセス作りを考え実践した。

最初にB2サイズほどの比較的大きめの紙にカラーペンを使い自由に「書く」行為を行った。具象ではなく抽象的な、ぐちゃぐちゃしたものや、言葉で表現できないものでも手が動けばそれでいいという様に指示をして自由に手が動くように呼びかけた。最初は躊躇している参加者も「いつもだったら怒られるようなことでも今日は大丈夫！」と呼びかけて、表現することに臆病にならない工夫をした。それでも時間が経過すると手の動きは鈍くなるので、そんなときは「残り2分です」などと残り時間を呼びかけることによって再び手が動き出すように促した。

次は描いたものを立体造形化する作業を行った。材料は「線」としてのアルミ線、「面」としてのスポンジシート、「塊」としてのスタイロフォームを使用した。「色」は書くときに使用したカラーペンをそのまま使って材料を塗る。このような素材の組み合わせで、作業性も両立しながら平面に表現したようなものでもほぼ立体にすることが可能になる。これらの材料は最初から見せずに「書く」という行為が終わった後に参加者の前に並べるこ

とにした。材料を先に見せると表現を材料に合わせてしまい、表現の幅が狭くなる可能性があるからである。自分の描いた2次元のものが3次元空間に出現することに参加者は驚くと同時に、言葉で表現出来ないようなものでも、実態を伴い具体化されることで自分の作業に自信がもてるようである。

その後は完成したこの作品を、やじろべえのように繋げて大きなモビールを作った。まず2人1組で重心を探した。どんな作品同士でも必ず重心（ある一つの答え）はある。どんどん繋いで最終的には一つの作品になり共同作業で答えを導くことの楽しさを伝えた。一つになった作品と参加者全員の集合写真を撮り、みんなで一つに繋げた証を残した。そして作品は個々にばらして、吊したまま持つことが出来るようにハンドルをつけて袋などに入れずに、そのまま見せびらかすことが出来る状態で家に持ち帰った。会場と家を繋ぐ間もアート表現の一部になるようにした。

自宅では個々の作品、参加者と繋がった作品の全体写真を共に飾ることによって、一つの場所で制作した作品が離れた場所に存在していても、同じ時間と気持ちを共有したことで繋がっている想いを持てるようにした。

自由に平面表現したものを立体化出来るように材料を選定して、個人からグループ、会場から家と表現活動が展開した。ワークショップではスムーズに制作が進むような仕掛けが必要であるが、あまりに方法論だけで参加者を型にはめると表現の幅が小さくなりがちである。今回のワークショップでは「書く」という行為から制作して持ち帰るところまで、一連の作業が上手く展開する仕掛けが用意でき、行うことが出来た様である。今後もいろいろな表現が飛び出すと同時に、造形活動が苦手な人も制作が進むようなワークショップのプランを作り、そして実践していきたい。



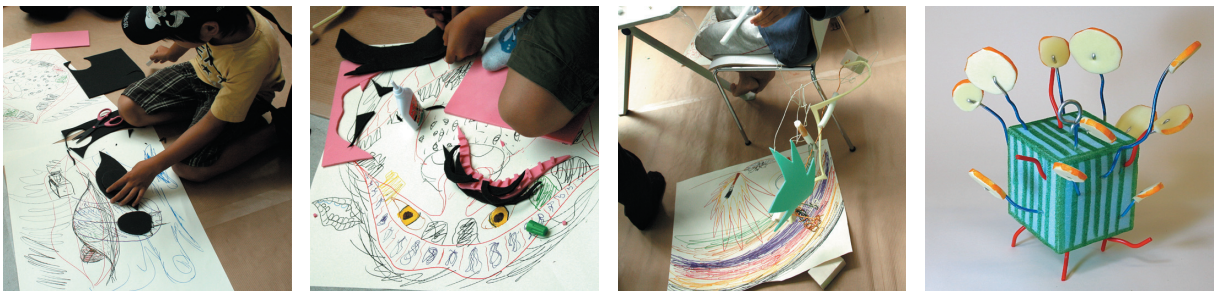
配布した完成作品と参加者の集合写真



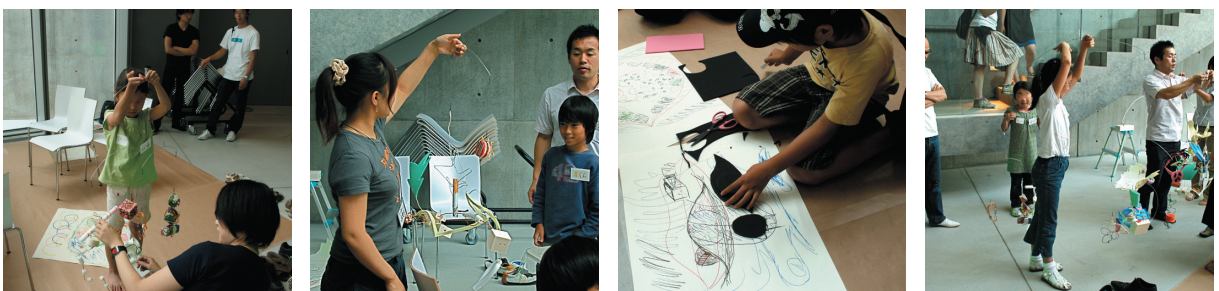
自由にドローイングを行う。大きな紙を使い、靴を脱いで自由な姿勢で描く。勢いが大切なのでどんどん手が動くように参加者に話しかける。最後は残り時間をカウントダウンして手を止めないように気持ちを保ちながらみんなで一気に描き上げる。



完成したドローイングを立体造形化する。「面」としてのスポンジ板、「線」としてのアルミ線、「塊」としてのスタイロフォーム、「色」としてのカラーマーカーを使用して切ったり、貼ったり、塗ったりする。



幅広い造形に対応できる材料なので、どんな表現のドローイングでも立体造形化が出来る。また目標がドローイングとして存在することによって、かたちにする行為がスムーズに進む。



出来たかたちを繋いで大きなモビールを作る。どんな重さに作っても必ず重心は存在する。明確な答えが制作活動に加わることで達成感を得ることが出来る。最後に全体写真を撮ってその場ですぐプリントをして参加者に配る。作品は単体に戻す。そしてハンドルをつけて吊り下げたまま街の人達に自分の作品を見せびらかしながら家に持ち帰る。写真とセットにすることにより家でもどのようなワークショップを行ってきたのかを説明することが出来てそこにコミュニケーションが生まれる。